特集

学術情報へのアクセス向上を目指して―機関リポジトリのいま

インド ―アクセスと可視性の向上へ向けて

坂井華奈子

インドには現在約四〇の機関リポジトリ（以下IRとする）があり（二〇〇八年一二月時点ROAR登録数四〇、OpenDOAR登録数三三）、これはアジアの中では世界四位の日本に次いで多い数である。

本稿では、主に最近発表された英語の文献を元にインドのオープンアクセス（以下OAとする）事情に触れつつ、社会科学分野をカバーするOA情報源を紹介する。

OAに関して開発途上国の中で比較的大きな存在感を持つインドの事情についてはたびたび国際会議等で発表されている。

二〇〇八年一一月にドイツで開催されたOAに関する国際会議Berlin6では、「発展のためのOA、世界各地のOA」と題したセッションで、途上国のOAを巡る現況とその発展の障害について話し合われた。同セッションでの発表のビデオと資料へはBerlin6のウェブサイト（http://www.berlin6.org/?page_id=70）からアクセス可能である。

インドからはCenter for Internet and SocietyのArunachalam氏が議長を務め、さらに「科学と発展のためのOA―インドの事例」と題した発表（参考文献①）を行った。また、学術雑誌のOA化の成功例としてしばしば言及されるインドの薬学分野の出版社Medknow社のSahu氏が「OA出版の引用および経済的インパクト―開発途上国からの事例」と題した発表（参考文献④）を行った。後者は他の途上国の事例も交え、OA化の影響をデータを元に示したものである。Medknow社の出版モデルは、オンラインの投稿・査読システムで時間と資源を節約し、投稿料はとらずに広告料や会費、プリント版の購読料や抜刷料等からの収益で論文を迅速に無料公開することで可視性を高め、著者や読者を引きつけることを可能にしている。OA化は可視性の向上、投稿者の増加、品質の向上、引用の増加や索引データベースへの採録等、研究のインパクト増大を助ける効果があり、そしてプリント版の購読数の減少にはつながらないことを引用データやアクセス統計等実際の数値を元に示している。

前者のArunachalam氏は議長を務めていることからもわかるように途上国でのOA化を唱導するキーパーソンの一人である。二〇〇八年六月にカナダで開催された電子出版物のOA化に関する国際会議ELPUBでも、同氏は「インドにおけるOA―希望と失望」と題した発表（参考文献②）を行っている。

シリアルズクライシスと呼ばれる学術雑誌の価格高騰は欧米諸国や日本でさえ深刻な問題であるが、途上国ではなおのことである。経済発展がめざましいインドだが、いまだ国民の多くは貧困の中に暮らしており、多くの図書館では利用者の必要とする学術雑誌の購読料をまかなえず、研究者は情報の貧困な状況下での研究活動を強いられている。OAが国内外でより普及すればこのような情報格差は減少し、インドの研究成果の可視性や国際的なインパクトも高まることが期待できる。だが、現状ではOAに対する認知度はまだ低い。前述のSahu氏の発表の例のように、OA化は医学・薬学分野や科学技術分野で先行して進んでいるが、Arunachalam氏はその発展の速度は緩慢であると言う。また、会議等を開催しOAに関してさかんに言及しても、インドではそれが実行につながることは少

表１　OA可能な社会科学分野の情報源リスト（インド）

名　　称［URL］	主　要　提　供　機　関	内　　容
ICFAI Business School Ahmedabad Digital Repository［http://202.131.96.59:8080/dspace/］	ICFAI Business School, Ahmedabad, India	経営学、経済学、数学、統計学、情報科学等の分野の雑誌論文、会議録、ケーススタディ、図書、教材等を収録したIR。
DSpace@IIMK［http://dspace.iimk.ac.in/］	Indian Institute of Management Kozhikode, India	経営学、ビジネス、経済学、コミュニケーション学、社会科学分野の雑誌記事、書評、会議論文、ワーキングペーパー等を収録したIR。
DSpace@INFLIBNET［http://dspace.inflibnet.ac.in/］	Information and Library Network (INFLIBNET) Centre, Ahmedabad	インドの学術・研究機関の情報インフラを構築するINFLIBNETのIR。主催する図書館関係の年次総会の会議録や、出版物、トレーニングプログラムの教材等を収録。
University of Delhi EPrint Archive［http://eprints.du.ac.in/］	University of Delhi, Delhi	デリー大学の様々な学部の学生、研究者、教員らの研究成果を収録した複数の学問領域をカバーするIR。
Digital Repository at Management Development Institute［http://dspace.mdi.ac.in/dspace/］	Management Development Institute Library, Gurgaon	主に教員や研究者の研究成果を収録したIRだが、年間ビジネススクールランキング等も提供している。
OneWorld South Asia Open Archive Initiative［http://open.ekduniya.net/］	OneWorld South Asia, New Delhi　(OWSA)	ミレニアム開発目標の達成におけるICTの役割に関する500以上の草の根組織とのネットワークを持つ国際的な組織OWSAとその関連機関の作成した南アジア地域の情報やコミュニケーションと開発に関する文献を提供するIR。
Archives of Indian Labour: Integrated Labour History Research Programme［http://www.indialabourarchives.org/］	V.V. Giri National Labour Institute, Noida	インドの労働者に関する文書のアーカイブ。
Vidyanidhi［http://www.vidyanidhi.org.in/］［http://dspace.vidyanidhi.org.in:8080/dspace/］［http://210.212.200.226/］	University of Mysore, Mysore	博士論文の国家規模のリポジトリ。カンナダ語、ヒンディー語でも検索可能。
Knowledge Community on Children in India: Turning Knowledge into Action［http://www.kcci.org.in/］	eSocialSciences, Mumbai (Content Management); Strategic Planning, Monitoring and Evaluation Unit, UNICEF, New Delhi	インドのユニセフが支援する、保健、教育、児童保護、児童労働等インドの子どもに関する幅広い情報のリポジトリ。
Librarians' Digital Library (LDL)［https://drtc.isibang.ac.in/］	Documentation Research and Training Centre (DRTC), Indian Statistical Institute, Bangalore	図書館情報学分野の国家規模のリポジトリ。雑誌論文、会議録、学位論文、プレゼンテーション資料等が登録されている。
Urban Health Gateway［http://uhrc.in/uhgateway/home/index.php］	Urban Health Resource Centre (UHRC), New Delhi	インドの都市部の貧困層の健康とその関連領域のOA文献を集めたサブジェクトゲートウェイ。

（出所）参考文献③より筆者作成。

なく、発言と実践の間にはギャップがあることを指摘している。

例えば、二〇〇六年に第九三回インド科学会議で公的な助成を受けた研究成果の電子化とOA化を提言したOptimal National Open Access Policyが提案されたが、その後も首相の高等諮問機関である国家知識委員会はOAに関し同様の内容を含む強い勧告を行っている。

OA化の促進には継続的な啓蒙活動とたゆまぬ努力、そして現場への研修の実施や政策決定者らへの働きかけの、ボトムアップ・トップダウン双方のアプローチを展開することが要であると同氏は述べている。

ユネスコは「知識と情報へのOA―学術文献と電子図書館の取り組み　南アジアのシナリオ」（参考文献③）で南アジアの主要な電子図書館（一七）、オープン・コースウェア（六）、OA雑誌（六）、メタデータ・ハーベスティング・サービス（五）、国家規模のOAリポジトリ（六）、IR（一九）を紹介している（括弧内は紹介されている件数）。これはウェブで無料公開されており南アジアのOA事情を知るよい資料である。ここでは、その中からインドで構築されたOA情報源のうち社会科学に関連するものを抜粋して表1にまとめた。なお、手稿等の貴重書や文化遺産等に関する大規模な電子図書館プロジェクトも複数あるが本稿では省略する。

ところが、実際にアクセスを試みると非常に時間がかかったり、リンク切れやサーバダウン等でつながらないことがしばしばあった。安定的なサービス提供にはサーバ等のインフラの維持やそれにかかる資金の確保も課題であろう。前掲書で紹介されている取り組みの多くは政府か欧米の機関や国際プロジェクトの支援を受けたものであった。

インドには四〇〇以上の大学等の高等教育機関があり、その他にも多くの研究機関が存在する。冒頭で挙げた四〇というIR数はその一割でしかない。南アジアのOA活動をリードするインドだが、その発展はまだ途上の段階にあるといえるだろう。けれども、こうした動きが広まり、現地事情を知る上で有益な情報を含む現地誌に発表された論文や学位論文等、これまで外国からの入手が困難だった種類の文献をオンラインで無料で読むことができるのは喜ばしいことである。今後のさらなる発展に期待したい。

（さかい　かなこ／アジア経済研究所図書館）

《主要参考文献》

①Arunachalam, Subbiah, *Open Access for Science and Development: The Case of India*, 2008.

②Arunachalam, Subbiah, *Open Access in India: Hopes and Frustrations*, Proceedings of the 12th International Conference on Electronic Publishing held in Toronto, Canada 25-27 June 2008, edited by Leslie Chan and Susanna Mornati, pp. 271-279. <http://elpub.scix.net/cgi-bin/works/Show?271_elpub2008>

③Das, Anup Kumaret al., *Open Access to Knowledge and Information: Scholarly Literature and Digital Library Initiatives; The South Asian Scenario*, 2008, 137 p. <http://unesdoc.unesco.org/images/0015/001585/158585e.pdf>

④Sahu, Dev, Kumar, *Citation and Economic Impact of Open Access Publishing: Examples from the Developing World*, 2008.